

フィリピン滞在記 ⑤ ---日本への一時帰国とその後のフィリピンでの活動

為我井輝忠

3月で日本語クラスは一段落したので、日本に一時帰国した。私が San Fernando (サン・フェルナンド) で教えているところは TESDA (Technical Education & Science Development Authority) という教育機関で、フィリピン全土に6～7か所ほどある高等科学技術学院のひとつである。

一時帰国したのは、3月23日から4月6日までの2週間である。真夏のフィリピン(この時期4月、5月は夏の季節で、学校はすべて休みである)から春先のまだ寒さが残る日本への帰国は、羽田空港に着いた途端風邪を引きそうなほどの寒さで、大いに戸惑いを感じた。

2週間と言ってもあつという間であった。今回の帰国は2つの目的があった。ひとつは、3月29日(日)『はだしのゲン』出版記念会に出席することであった。スリランカの仏教僧で千葉県香取市にある蘭華寺の住職であるダランガレー・ソーマシリ師が数年前から取り組んでいた中沢啓治原作『はだしのゲン』を日本語からスリランカのシンハラ語に翻訳された。その出版を祝う会が蘭華寺で行われた。

もう一つは、まちだ・さがみユネスコ協会の被爆ア

オギリ2世の植樹式が町田市にある勝楽寺で3月30日(月)に行われ、関係者としてその式典に出席した。

被爆アオギリというのは、昭和20年(1945年)8月6日アメリカ軍の原子爆弾投下によって被爆した広島で、わずかに残った数本の青桐の木で、その後息を吹き返し元気になり、その2世が日本各地に移植されている。今回、広島市長にお願いして頂いた一本の苗木を町田の地に植樹することが出来た。

この両者とも前から出席を要請されていたので、早めに航空券を購入しておき、無事に出席することが出来た。その他にも「わんりい」の会の皆さんとお会いしたり、和歌山と大阪に行き、スリランカ人留学生と会う等多忙を極めた。

私のフィリピンへ戻るに際して家内を伴って行った。家内にとってはフィリピン訪問は2回目になるが、前回はマニラとその周辺だけだったので旅行というほどのことではない。今回はマニラに3泊、ビガンに2泊、その他はサン・フェルナンドに滞在し、一緒に2週間を過ごした。

サン・フェルナンドにいる間にダグーパンというところに行く機会もあった。ここで「日本文化フェス

た」を開催し、折り紙や日本文化を紹介する機会があった。

ダグーパンに行く機会もあった。ここで「日本文化フェス



『はだしのゲン』出版記念会で挨拶をしているソーマシリ師



「まちだ・ユネスコ協会」での被爆アオギリ2世植樹式



ダグーパンでの日本文化紹介で折り紙を教える筆者



フィリピン人の名前をひらがな、カタカナ、漢字で紹介している為我井夫人。

ティバル」が開催されるためにその手伝いに2人で参加した。これは地元で事務所のあるNISVA(技能ボランティア海外派遣協会)がバングース・フェスティバルの一環として協力開催したもので、日本人の方々が20名近くまたその関係者たちも参加された。浴衣の着付け、

カラオケ大会、折り紙コーナー、生け花コーナー、マッサージ等の分野で日本文化の紹介が行われた。私たちは折り紙コーナーに参加し、地元の多くの方々に紹介することが出来た。どれも地元の人々が熱心に参加され、やりがいがあった。

今回はあまり遠出はしなかった。サン・フェルナンドからバスで3時間ほどのビガンへ出掛けただけであった。ここはスペイン時代の街並みが残る古い街で、歩いているとかつての古い華やかな頃を思わせる建物や雰囲気随所に残されている。街中をカレッサと呼ばれる馬車で見学したが、大いに興味のあるところである。帰路サン・フェナドへ戻る途中に「サンタ・マリア教会」(正式名はヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・アスンシオン教会)に立ち寄った。ここも世



スペイン風の街並みが世界遺産に登録されているビガン(Vigan)の街並み

界遺産に登録されているバロック様式の教会である。

こんなふうにしてあわただしい帰国と家内の来比はかなり忙しい毎日であった。しかし、私にとっては久しぶりの日本での生活に心安らぐことが出来、また家内にとってもフィリピンの素晴らしさを体験できたものと思う。

タランガレー・ソーマシリ師のこと

昨年9月のまだ残暑が厳しい頃、水彩画家の友人の個展で、初めてタランガレー・ソーマシリ師にお会いした。友人は、スリランカで使用されている日本語教科書の挿絵を描いたのが機縁で、ソーマシリ師と既に知り合いだったのだ。

古い民家を改造した風の、やや暗いギャラリーで友人とお茶を飲んでいると、ギャラリーの入り口が開かれガッチリした小麦色の体躯に鮮やかな緋色の袈裟で身を包んだ師が、光を背に“燃え上がる炎の塊”とでもいいたいような、そんな感じで入って来られた。

日本語はよくお出来になられるご様子だったがご自分はあまり話されず、どちらかといえば私達が話すのを温かな心で聞いて下さっているといった安心感があった。帰りは立川から新宿まで帰りを一緒にした。電車の中では私が一方的に話していたような気がするが、とても波長が合っている心地だった。

師が翻訳の、シンハラ語訳「はだしのゲン」(1巻、2巻)出版記念の会を報道した毎日新聞によれば、師は日本とスリランカとを行ったり来たりされながら、日本では香取市の蘭華寺でスリランカ人に布教活動をし、スリランカに帰られては、コロombo郊外の平和寺の住職を務め、26年に亘るスリランカ内戦などによる孤児(8~20歳)35人と暮らしているとのことだ。昨年9月、「戦争は苦しみ、悲しみ、悩みしか残さない。平和の大切さを訴えているこの作品を紹介したい」とシンハラ語での翻訳を思い立ち、午前5時からの寺の仕事に差し障らないよう、起床を更に2時間早めて翻訳に充てたそうので、今年6月には第3巻が出版の予定とある。

(田井記)